

日蓮大聖人御書全集

いちだいごじず

一代五時図

新版
895
〜
901

いちだいごじず

一代五時図

りゅうじゅぼさつぞう

竜樹菩薩造

だいろん い

じゅうくしゅつけ

さんじゅうじょうどう

じょうぼんおう

たいし

しつたたいし

大論に云わく

「十九出家、

三十成道」

浄飯王の太子

悉達太子

とじゅんほつし

杜順法師

ごんだいじょう ろくじっかん

権大乘 六十卷

ちぎほつし

智儼法師

けごんぎょう

華嚴經

けごんしゅう

華嚴宗

ほうぞうだいし

法蔵大師

さんしちにち

はちじっかん

三七日 八十卷

ちようかんほつし

澄観法師

ぞういちあごんぎょう

増一阿含經

くしやしゅう

俱舎宗

せしんぼさつ

世親菩薩

しょうじょうきよう
小乗経

ちゅうあごんぎよう
中阿含経

げんじょうさんぞう
玄奘三蔵

あごんぎよう
阿含経

ちようあごんぎよう
長阿含経

じようじつしゅう
成実宗

かりばつま
迦梨跋摩

じゅうにねん
十二年

ぞうあごんぎよう
雑阿含経

りつしゅう
律宗

どうせんりつし
道宣律師

にひやくごじつかい
二百五十戒

そう
僧

しょうじょうかい
小乗戒

ごひやくかい
五百戒

に
尼

ごかい
五戒

なんによ
男女

はっさいかい
八斎戒

なんによ
男女

ゆがろん
瑜伽論

ひやつかん
百卷

みろくぼさつぞう
弥勒菩薩造

げんじょうさんぞう
玄奘三蔵

権大乘
ごんだいじよう

深密經
じんみつきよう

五卷
ごかん

唯識論
ゆいしきろん

世親菩薩造
せしんぼさつぞう

法相宗
ほつそうしゅう

慈恩大師
じおんだいし

曇鸞法師
どんらんほつし

六十卷
ろくじっかん

双卷經
そうかんぎよう
二卷
にかん

道綽禪師
どうしやくぜんじ

大集經
だいじつきよう

淨土三部經
じようどさんぶきよう

觀經
かんぎよう
一卷
いつかん

淨土宗
じようどしゅう

善導和尚
ぜんどうおしょう

阿彌陀經
あみだきよう
一卷
いつかん

法然房
ほうねんぼう

善無畏三藏

金剛智三藏

大日經
だいにちきよう
七卷
しちかん

不空三藏
ふくうさんぞう

方等部
ほうどうぶ

金剛頂經
こんごうちようきよう
三卷
さんかん

真言宗
しんごんしゅう

惠果和尚
けいかわじよう

蘇悉地經 そしつじきよう
三卷 さんかん

三十年 さんじゅうねん

楞伽經

十卷 じっかん

四卷 しかん

禪宗 ぜんしゆう

弘法大師 こうぼうだいし

慈覺大師 じかくだいし

智証大師 ちしようだいし

達磨大師 だるまだいし

慧可 えか

僧璨 そうさん

道信 どうしん

弘忍 こうにん

慧能 えのう

権大乘
ごんだいじょう

百論
ひやくろん

提婆菩薩造
だいばぼさつぞう

般若
はんや

中論
ちゅうろん

竜樹菩薩造
りゅうじゅぼさつぞう

三論宗
さんろんしゅう

興皇
こうこう

四十卷
しじっかん

十二門論
じゅうにもんろん

同
どう

嘉祥大師
かじょうだいし

吉蔵
きちぞう

七十二歳
しちじゅうにさい

無量義經
むりょうぎきょう

「四十余年にはいまだ眞実を顕さず」
しじゅうよねん しんじつ あらわ

ほうべんりき

しじゅうよねん

しんじつ

あらわ

「方便力をもつて、四十余年にはいまだ真実を顕さず」

むりようむへんふかしぎあそうぎこう す

つい むじようぼだい

「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、終に無上菩提

じよう

え

ゆえん

ぼだい

だいじきどう

し

を成ずることを得ず。所以はいかん。菩提の大直道を知ら

ゆえ

けんきよう

い

るなんおお

ゆえ

ざるが故に、險逕を行くに、留難多きが故なり」

だいじきどう

い

るなんな

ゆえ

「大直道を行くに、留難無きが故なり」

けんろしゆう

顕露宗

さいひみつしゆう

最秘密宗

ぶつりゆうしゆう

実大乘

法華経

仏立宗

はちかねん

八箇年

ほつけしゅう

法華宗

てんだいしゅう

天台宗

せそん ほうひさ

のち

かなら

まさ

しんじつ

と

「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべ

し」

しょうじき

ほうべん

す

むじょうどう

と

「正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」

しゅじゅ

どう

しめ

じつ

ぶつじょう

「種々の道を示すといえども、それ実には仏乗のためな

り」

いま

さんがい

みな

わ

う

なか

しゅじょう

「今この三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、

ことごとくこれ吾が子なり。わ こ しかるに今この処は、いま 諸の

げんなんおお

われいちにん

よ くご

きようしよう

患難多し。ただ我一人のみ、能く救護をなす。また教詔す

しんじゆ

といえども、信受せず」

ひとしん

きよう

きぼう

すなわ

いっさいせけん

「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、則ち一切世間

ぶつしゆ

だん

ひんしゆく

ぎわく

いだ

の仏種を断ぜん。あるいはまた顰蹙して、疑惑を懷かん。

なんじ まさ

ひと

ざいほう

と

き

ほとけよ

汝は当にこの人の罪報を説くを聴くべし。もしは仏世に

あ

めつど

のち

きようてん

在るも、もしは滅度して後も、それかくのごとき經典を、

ひぼう

きよう

どくじゆ

しよじ

もの

誹謗することあらん。経を読誦し書持することあらん者を

み

きようせんぞうしつ

けつこん

いだ

ひと

ざいほう

なんじ

見て、輕賤憎嫉して、結恨を懷かん。この人の罪報を、汝、

いま き ひと みようじゅう あびごく い いったう

今また聴け。その人は命終して、阿鼻獄に入らん。一劫を

ぐそく こうつ う てんでん

具足して、劫尽きなば、さらに生まれん。かくのごとく展転

むしゅこう いた

して、無数劫に至らん」

もうしん う

「ここにおいて死し已わって、さらに蟒身を受けん。そ

ぎよう ちようだい ごひやくゆじゆん

の形は長大にして、五百由旬ならん」

ぜんなんし ぜんによにん われめつど のち よ

「もしこの善男子・善女人、我滅度して後、能くひそか

いちにん ほけきよう ないしいつく と まさ し

に一人のためにも、法華經の乃至一句を説かば、当に知る

ひと すなわ によらい つか によらい つか

べし、この人は則ち如来の使いにして、如来に遣わされて、

によらい じ ぎよう

如来の事を行ず」

やくおう

あくにんあ

ふぜん

こころ

いつこう

なか

「薬王よ。もし悪人有って、不善の心をもつて、一劫の中

げん ぶつぜん

つね ほとけ

きめ

つみ

において、現に仏前において、常に仏を毀罵せば、その罪は

かる

ひと ひと

あくごん

ざいけ

しゅつけ

ほけきよう

なお軽し。もし人、一つの悪言をもつて、在家・出家の法華経

どくじゆ

もの きし

つみ

おも

を讀誦する者を毀訾せば、その罪ははなはだ重し」

やくおう

いまなんじ

つ

わ と

しよきよう

「薬王よ。今汝に告ぐ。我が説くところの諸経、しかも

きよう

なか

ほつけ

もつと

だいいち

この経の中において、法華は最も第一なり」

わ と

きようてん

むりようせんまんおく

すで

と

「我が説くところの經典は無量千万億にして、已に説き、

いまと

まさ と

なか

ほけきよう

今説き、当に説くべし。しかもその中において、この法華経

もつと

なんしんなんげ

は最もこれ難信難解なり」

「もし法師に親近せば、速やかに菩薩の道を得、この師に

ずいじゆん

がく

ごうじや

ほとけ

み

え

随順して学せば、恒沙の仏を見たてまつることを得ん」

とき

ほうとう

なか

だいおんじよう

い

ほ

のたま

「その時、宝塔の中より大音声を出だして、歎めて言わ

よ

よ

しやかむにせそん

よ

びようどうだいえ

く『善きかな、善きかな。釈迦牟尼世尊は、能く平等大慧、

ぼさつ

おし

ほう

ほとけ

ごねん

菩薩を教うる法にして、仏の護念したもうところの

みようほけきよう

だいしゆ

と

妙法華經をもつて、大衆のために説きたもう。かくのごと

しやかむにせそん

と

し、かくのごとし。釈迦牟尼世尊の説きたもうところのご

みな

しんじつ

ときは、皆これ真實なり』と」

しよよ

きようてん

かずごうじや

と

「諸余の經典は、数恒沙のごとし。これらを説くといえ

ども、いまだ難しとなすに足らず。もし須弥を接つて、他方

むしゅ

ぶつど

な

お

かた

の無数の仏土に擲げ置かんも、またいまだ難しとなさず。

ほとけ

めつど

あくせ

なか

よ

きよう

と

もし仏の滅度して、悪世の中において、能くこの経を説か

ば、これは則ち難しとなす」

もろもろ

むち

ひと

あつく

めりとう

とうじよう

くわ

「諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、および刀杖を加

ものあ

われ

みなまさ

しの

あくせ

なか

びく

うる者有らん。我らは皆当に忍ぶべし。悪世の中の比丘は、

じゃち

こころてんごく

え

おも

え

邪智にして心諂曲に、いまだ得ざるを謂つて得たりとなし、

がまん

こころ

じゅうまん

あれんにや

のうえ

くうげん

我慢の心は充滿せん。あるいは阿練若に納衣にして空閑

あ

みずか

まこと

どう

ぎよう

おも

にんげん

きようせん

に在つて、自ら真の道を行ずと謂つて、人間を輕賤す

ものあ

りよう

とんじやく

ゆえ

びやくえ

ほう

と

る者有らん。利養に貪著するが故に、白衣のために法を説

よ
くぎよう

ろくつう

らかん

いて、世の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごと

つね
だいしゆ

なか

あ

われ

そし

ほつ

くならん。常に大衆の中に在って我らを毀らんと欲するが

ゆえ

こくおう

だいじん

ばらもん

こじ

よ

びくしゆ

む

故に、国王・大臣・婆羅門・居士および余の比丘衆に向か

ひぼう

わ
あく
と

じゃけん

ひと

げどう

ろんぎ

つて、誹謗して我が悪を説いて『これ邪見の人、外道の論議

と

い

じゃつこうあくせ

なか

おお

もろもろ

くふあ

を説く』と謂わん。濁劫悪世の中には、多く諸の恐怖有

あつき

み

い

われ

めり

きにく

じよくせ

らん。悪鬼はその身に入つて、我を罵詈・毀辱せん。濁世の

あくびく

ほとけ

ほうべん

よろ

したが

と

悪比丘は、仏の方便、宜しきに随つて説きたもうところ

ほう

し

あつく

ひんしゆく

ひんずい

の法を知らず、悪口して顰蹙し、しばしば擯出せられん」

だいじんりき げん

こうちようぜつ い

かみぼんせ いた

「大神力を現じたもう。 広長舌を出だして、 上梵世に至

しよぶつ

こうちようぜつ い

らしめ、諸仏もまたかくのごとく、 広長舌を出だしたもう」

もんじゆ ふげん かのん じぞうとう りゆうじゆぼさつ

文殊・普賢・觀音・地藏等、 竜樹菩薩、

ぜんむい こうぼう じかく ほうぞう かじよう ぜんどうとう

善無畏・弘法・慈覺・法藏・嘉祥・善導等なり

ほう よ にん よ

「法に依つて人に依らざれ」

いちにちいちや

一日一夜

ぎ よ べー よ

「義に依つて語に依らざれ」

ねはんぎよう

涅槃經

ち よ しき よ

「智に依つて識に依らざれ」

はちじゅうにゆうめつ

八十入滅

ほけきよう

法華經

「了義經に依つて不了義經に依らざれ」

かんぎようとう
觀經等

だいにちきようとう
大日經等

じんみつきようとう
深密經等

けこんぎようとう
華嚴經等

はんにゃきようとう
般若經等